子どもや家族の生活を支えて

～北海道大学周辺では～

▲日本語の学習はイラストや図を使って分かりやすく

ボランティア活動で留学生やその家族に日本語を教えるグループがあります。北海道大学の教職員の妻と女性教職員の有志で結成された北海道大学国際婦人交流会です。使用するテキストや教材などはすべて手作り。スタッフの一人、阿部睦子（あべもつこ）さんは「このテキストは、実際に留学生に教えていく中で、みんなで意見を出し合って改良を重ねてきたものです」と教えてくれました。

また、料理講習会を開催したり、病院の受診方法やごみの出し方のルールなど、生活情報を掲載したハンドブックを作って配布したり。日本語を教えるだけではなく、日本の文化や習慣を伝え、留学生とその家族の生活を幅広く支えています。

札幌で出産する人も増えていることから、子育て中の家庭に役立つガイドブックの作成にも取り組んでいます。編集責任者の松村操（まつむらみさお）さんは、「これまでの活動を通じて、異なる文化や生活習慣の中で、出産や育児をする人のためのガイドブックが必要だと、あらためて実感したんですよ」と話します。

▲テキストとハンドブックを手にする阿部さん（右）と松村さん。ハンドブックには女性ならではの視点で、生活情報が盛り込まれています

留学生やその家族の心強い味方である北海道大学国際婦人交流会の皆さん。「でも留学生の生活には私たちの活動だけではなく、地域の人たちの支えが必要です。留学生が地域の中で暮らし、交流を深めることができたらいいですね」と松村さんは笑顔で話してくれました。

世界各国の子どもと友だちに

幌北児童会館では、現在、中国やインドネシアなど六カ国、約十五人の子どもたちが、日本の子どもたちと一緒に遊んでいます。また、外国人のお母さんが子どもと遊んだり日本の昔遊びを楽しんだりすることもできます。

昨年からは、留学生が子どもたちに自分の国の言葉や遊びを紹介。世界には多くの国や民族が存在し、それぞれの文化や慣習を持っていることを、身近な友達を通して知ってほしいという願いが込められています。

十一月二十六日には、北九条小学校二年生のロクガマゲェ・エランガ君の国、スリランカの言葉や遊びが紹介されました。講師を務めるのは、エランガ君のお父さんとお母さんです。

北海道大学獣医学部に通うお母さんのクマリさんが「『こんにちは』は『スルセンデュクック』といいます」と説明すると、子どもたちから「『友達』ってなんていうの」「じゃあ、『楽しい』は？」と矢継ぎ早に質問が飛び出します。「エランガ君の国の言葉は難しいなあ」「この遊びは借り物競争と同じルールだね」と、文化の違いや共通点も発見したようです。

最後に、子どもたちは「ストゥティ（ありがとう）」とスリランカ語でお礼を言いました。子どもたちは遊びの中で、異なる言葉や文化を自然に受け入れ、他の国々への理解を深めているようです。

さまざまな国や地域の人と実際にふれあうことは、お互いの文化や慣習を知るきっかけになります。そんな交流の輪が地域に広がっていくと、外国人だけではなく、私たちにとっても住みやすい、魅力あふれるまちになることでしょう。まずは、私たちと同じまちで暮らす留学生たちに気軽に声を掛けてみることから始めてみませんか。

▲スリランカの伝統的な遊び「カンカンブール」に挑戦
▶日本の折り紙に夢中になるお母さんたち